

地域の灯は守られた

# 中里高校、単独校で存続へ

地域の思い、声が届いた——。県教委は11月19日(月)、県立高校再編第3次後期計画を決定し、中里高校は校舎化から学級減へと方針を修正。単独校での存続が決まった。

## ■単独校存続で一様に安ど

決定された第3次後期計画では、当初案で平成28年に校舎制導入を予定していた中里高校は、計画期間(H26～30年)中に1学級減を行うが、実質的な分校となる校舎制への移行は見送られた。次期計画で県全体の学校規模・配置を考え、改めて方向性を検討するという。

この決定を受け、存続に向けた運動を展開してきた関係者は、一様に安どの声を漏らした。町長は「存続が決まり喜んでいいる。高校生の通学事情を考えれば、中里高校はなくせない。今後も、町は全面的に支援していく」と、中里高校の存続に喜びの声を上げた。

## ■7月、町に衝撃走る

今年7月に、県教委から発表された「県立高等学校教育改革第3次実施計画(後期案)」は、

町を揺るがす事態に発展した。中里高校が、実質的な分校(校舎化)に移行すると明記されていたからだ。県教委は、生徒数の減少に対応するため、従来から高校の配置を第1次、第2次、第3次前期計画で見直してきており、今回校舎化の対象に、とうとう中里高校の名前が挙がったのだ。

報道で知った町役場や住民は、驚きと怒り、不安を口にし、中里高校の存続に向け、さまざまな機会を通じて、県教委に反対の声を届けることになる。

## ■説明会

県教委は、計画案の説明会を7月26日(木)、五所川原市中央公民館で開き、再編計画に対する考え方、西北五管内の学校がどのように変わるかを説明した。その中では、高校の役割や規模について、小規模校の良さを認めつつも、

○必要な教科・科目が設定できなくなる  
○集団中での切磋琢磨が必要  
○社会に出て行くためのたくましい心のかん養

などといった理由から、一定規模以上の学校であることが望ましいとした。その上で、平成30年頃から訪

れる「生徒急減期」に対応し、中里高校の入学状況、町中学校卒業者の進路状況を示しながら、中里高校は平成28年度に金木高校を本校とした校舎制に移行すると説明された。

これに対し、出席者から出た意見は、すべて中里高校の校舎化に関するもので、

○実質的な分校ということになれば、イメージダウンになりさらに入学者数が減る  
○学校をなくすことは地域の衰退につながる  
○中里高校は地域密着の学校、人数の少なさだけで判断しないでほしい

○1学級を維持できると認めているのに、なぜ単独校ではないのか  
○中里高校と金木高校を統合して1校という考えはないのか

といった閉校に対する不安を述べ、県教委側に校舎化の再考を迫った。



## ■地域とともにある中里高校の必要性

中里高校は近年、地域活動に重点を置いている。全校一斉の奉仕活動や高校生まちづくり塾参加、ホテルまつりでのボランティアバスガイド、夏まつり参加など、活動の幅は多岐にわたっている。地域とつながり、社会に出て通用する人間を育てるために行っているものだ。そして、通学面での地域性も

ある。中里高校は、地理的に津軽半島の中心にある学校。同校は、中里地域からの生徒だけではなく、小泊地域やつがる市車力町、五所川原市市浦からの入学生もある。この高校がなくなるといことは、生徒たちに通学の不便を強いことになる。そして何よりも、校舎化となれば「中里高校」の歴史は閉じられる。巢立っていった卒業生は母校がなくなることになるば

かりか、地域経済への悪影響も懸念されるところだ。

## ■今も、これからも「中里高校」であり続けるために

第3次後期計画での校舎化は見送られた。しかし、県教委も言及しているとおり、次期計画では、1学級規模の学校の方向性について、改めて判断するとしている。全国的に人口の減少傾向が続く、町も例外ではなく、中学校卒業生の減少は確実だ。平成30年には生徒急減期が訪れる。町はこれからも単独校存続のためにさまざまな支援を行うが、次期計画での中里高校の扱いに注目したい。

中里高校は、今後単独校として歩んでいくことになるが、小規模校には小規模校の良さがある。

「人数が少ない分過ごしやすい。そのせいか、まとまりがある。先生方も1人1人に尽くしてくるので、何でも話せる雰囲気。昨年11月号で中里高校を特集した際、生徒会役員の野上さんが口にした言葉だ。小規模校の良さを、一言で表しているように思った。

宮本校長がインタビューで言っていたが、中里高校は「地元

と一緒に成長する」学校なのだ。地域活動に力を入れる同校の活動は、逆に大規模校にはできないことをしている、とは考えられないか。ボランティア活動などで社会との関わりを深め、たくましい大人となるよう行われる教育活動は、県教委がいう「高校の役割」と合致するのではな

いか。最近、2年連続で国立大合格者を出すなど、生徒の進路指導面で取り組みを充実させている中里高校は、地域の悲願で開校にこぎ着けた、町にとって思い入れがある学校だ。この大事な灯を絶やしてはならない。

## 関係者の声



高校生まちづくり塾塾長  
夏原謙二さん

とにかく「よかった」の一言。町の支援もあり、声が届いたという感がある。まちづくり塾では生徒の成長を感じていたので、地元に残ってよかった。町だけでなく近隣も、そして子どもがいない人も巻き込み、地域を挙げてこれからも支援するという姿勢が大事だ。



中里高校PTA会長  
三橋 亨さん

計画案が発表されたときは不安だったが、単独校存続を聞いて本当によかった。保護者や生徒たちの中でも、学校をなくしたくないという機運があったので、ほっとしている。今後も地域に根ざす学校、特色ある学校を目指し、それが入学者増につながれば。



【全校一斉奉仕活動】



【夏まつりにも参加】



【高校生まちづくり塾】



【ドイツ高校生とディスカッション】